

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：ウェイン・ワン
原作・脚本：イーコン・リー
短編『千年の祈り』（新潮社刊新潮ク
レスト・ブックス『千年の祈り』所収）
出演：ヘンリー・オー／フェイ・ユ
ー／ウィダ・ガレマニ／バジ
ャ・リチニコフ

千年の祈り

2007年・日本、アメリカ合作映画
配給／東京テアトル・83分

2009（平成21）年10月21日鑑賞

GAGA試写室

👁️👁️ みどころ

アメリカ育ちの中国人監督や俳優が、小津安二郎の『東京物語』（53年）風の静かな父娘の会話劇を完成！一人娘の離婚を父親が心配するのは当たり前。北京からアメリカに飛んだ父親が見た娘の生活ぶりは？プライバシー面からは多少問題あり（？）だが、告白タイムのクライマックスと、そこから生まれる心の安らぎの描写は絶品。たまには、こんな静かな小品で心の洗濯を。

* * * * *

小津安二郎の世界はちょっと退屈？それとも？

戦前生まれの人はおしなべて小津安二郎監督のファンが多いが、『ウエスト・サイド物語』（61年）に興奮した私たち団塊世代には小津安二郎の世界は少し退屈？尾道に暮らす年老いた両親が東京で暮らす子供たちの家を訪ねる姿を描く彼の最高傑作『東京物語』（53年）は東京での日常を淡々と描くが、そのスローな展開をみているとどうしても私には少し退屈に思えてしまう。

プロダクションノートによると、ウェイン・ワン監督がイーコン・リーの短編小説『千年の祈り』を読みその映画化を決めたのは、原作の中に「学生の頃に尊敬していた小津安二郎監督の作品と、同じ世界観を感じたから」らしい。『東京物語』は訪れるのが夫婦だし、東京に住む子供たちは長女、次女、長男の3人。しかし本作の設定はもっとシンプルで、妻に先立たれた北京に暮らす父親シー氏（ヘンリー・オー）が、アメリカで今は離婚して一人で暮らす娘イーラン（フェイ・ユー）を訪れるもの。2人とも年齢は明らかではないが、見るところ父親は70代で娘は30代？

アメリカで10年以上過ごしているイーランの英語が達者なのは当然だが、70代の中国人は英語をどの程度？付随的にはそんな心配があるが、なぜシー氏はアメリカに住む娘

への訪問を決意したの？そして、タイトルの「千年の祈り」とは？それが本作の本質的テーマだ。

3人ともアメリカに活躍の場が

最近では北朝鮮をめぐる「6カ国協議」のみならず、先進国や主要国が集まるG8やG20でも中国の影響力が拡大している。米中で太平洋の真ん中で割ろうなどという物騒な話題まで浮上しているほどだ。米ソ冷戦時代はもとより、1966年から77年までの文化大革命時代の中国はアメリカにとってまさに異国だったが、逆に中国人は世界各地に活動拠点を持っている。

本作のウェイン・ワン監督は香港で生まれたが18歳の時からカリフォルニア州に移ったらしい、イーユン・リーも長年シアトルに住んでおり、帰国の要請を断ったこともあるらしい。また北京電影学院を卒業した女優のフェイ・ユーも、ロサンゼルスへ移り住み英語を学んだ才媛。今は中国に帰っているらしいが彼女が本作に抜擢されたのは、演技面はもちろんだが流暢な英語をしゃべれるため。そんな風に三者三様、アメリカに活躍の場がある監督や俳優が本作に結集！



(C)2007 Good Prayers, LLC All Rights Reserved

それも愛情、これも愛情だが・・・

「日本は殺人事件の半分以上は親子兄弟夫婦の殺し。(経団連の)責任だ」と発言した亀井静香郵政・金融担当大臣に対して経団連は一斉に反発したが、それは当然だ。父親は一人娘の幸福を願うもの。したがって一人でアメリカに渡った娘が離婚したと聞いて、妻に先立たれたシー氏が居ても立ってもいられなくなったのは当然。そこで思いついたのが、アメリカ観光に名を借りた娘の偵察？

映画は空港に降り立つシー氏を迎えるイーランの姿からスタートするが、車の中での会話や家に戻ってからの会話はどことなくよそよそしいし、イーランは何となく元気がない。父親の目には、そんな娘の姿が離婚の痛手から立ち直っていないためと映ったのは当然。そこで翌日シー氏がとった作戦は、北京で高齢者向けの料理教室に通った腕をふるうため、中華鍋を買い込んでイーランに料理を作ってやり元気づけること。しかし、それに対するイーランの反応は冷やか。「なぜそんなに無口なのか？」と問いかけるシー氏に対して「お父さんも昔は無口だったわ。幸せじゃなかったの？」と切り返される始末。これでは取り付くシマもないが、なぜイーランは娘のことを心配している父親に対してそんな邪険な対応を？

こりゃまるで監視？それともこれが父親の愛？

一人暮らしながら、イーランのアパートはそれなりに立派なもの。娘のアパートに父親が訪れてきたのだから、仕事に出るイーランがシー氏に鍵を渡すのは当然だし、シー氏が家の中を歩き回るのはもちろん自由。しかし、そこには守るべきプライバシーがあるのは当然。ところが、娘の部屋の中に入っていくシー氏の姿をみていると、こんな年頃の中国人にはアメリカ流のプライバシーの概念が薄いのかなと、つい思ってしまう。

また、帰宅後の外出や深夜の帰宅、さらに外泊まであるイーランの暮らしをシー氏が心配したのは当然だが、最終バスに乗ってなかったイーランがある男性の車で帰ってくるのを見て、あれこれと追及するのは、私の感覚ではちょっとやりすぎ。したがって、「送ってきた男は誰だ？」に始まる矢継ぎ早の質問に、イーランが「監視しているの？」と反発したのは当然。そうなると、その後の「お父さんはいつまでこっちにいるつもり？」との質問も流れから当然で、ますます父娘の距離は広がっていくばかり。

こりゃまるで監視？それともこれが父親の愛？それは微妙なところだが、さてあなたの判定は？

告白タイムは？腹を割った話し合いから何が？

本作は小津安二郎作品ばりに父娘の微妙な心情を会話劇の中で綴っていくものだから、少し退屈気味。しかし、その会話劇がクライマックスを迎えるのは、互いの告白タイムが到来した時だ。まずイーランからの告白は、離婚は夫のせいではなく、今の男との関係が原因だということ。そんな告白をしてしまったイーランのシー氏に対する次のセリフは、

「いつ嘘をやめるの？工学者じゃなかったでしょ。お母さんも私も知っていた。皆、あの女の人のことも知っていたわ」という厳しいものだったから大変。さあ、こんな娘からの反発を受けて、シー氏はどのように対応？

クライマックスといっても、父親からの娘に対する会話はあくまで静かなもの。面白いのは、それが壁を隔てた部屋同士で行われることだ。私は弁護士として話をする時は目と目を見ながらハッキリ話すことを心がけているが、心の微妙なヒダを告白タイムで語るには目の前に相手がいらない方がいい場合も？そんな静かなクライマックスの会話劇の中で、父親の口から出た告白とは？

言葉はどこまで必要？語学の初心者必見！

ホントは英語ペラペラの俳優ヘンリー・オーが片言しか英語をしゃべれないシー氏役を演ずるのは大変だったはずだが、本作をみているとシー氏の英語はやはり上手すぎ？シー氏のような年配の中国人が付け焼刃的に勉強した英語では、ホントはここまでしゃべれないはずだ。同じように思うのが、公園のベンチでシー氏が毎日話し合うイラン人のマダム（ヴィダ・ガレマニ）との会話。中国語とベルシャ語が互いに全く通じないのは当然だから、ホントに初歩的な英語だけで会話しているわけだが、これが意外とよく通じていることにビックリ。

そんな姿をみていると、人間同士の気持を伝えるのに言葉はどこまで必要？とつい疑問に思ってしまうが、それはやはりシー氏くらい英語がしゃべれることが大前提？そう考えると、2009年4月から中国語会話の勉強を始めた私も「人間同士の気持を伝えるのに言葉はどこまで必要？」などと言わず、しっかり勉強を続けなければ。そんな意味で本作は語学の初心者必見！

最後もあっさりど

ヘンリー・オーがベテラン俳優として味のある演技をみせているのは当然だが、私がこれまで全然知らなかった中国人女優フェイ・ユーも実に情感のこもった演技をしている。北京電影学院の何期生かはわからないが、年齢的には1974年生まれの徐静蕾（シュー・ジンレイ）と同じくらい？今後の彼女の活躍に注目しなければ。

それはともかく、本作はスタートもあっさりなら、ラストもあっさり。「飛行機に乗ったツアーではアメリカをよく見るができない」という理由でシー氏が列車の旅を選択したのは、自由な時間がたっぷりあることを前提とすれば正しい選択。その結果、物語の始めは空港、物語のラストは列車の駅とバリエーションが豊かになったからラッキー？

さて、列車でアメリカ観光のツアーに旅立つシー氏とそれを見送るイランとの間で交わされた会話とは？そしてまた、そこではじめて見るイランの笑顔はなぜ？そんな笑顔にシー氏もそしてあなたも、ほっとすると共にきつとしい気持ちになるはずだ。

2009（平成21）年10月23日記

表紙撮影の舞台裏（11）

あなたは08年9月30日から09年10月31日まで日経新聞で連載されていた高樹のぶ子の『甘苦上海』（かんくうしゃんはい）を読んだことがある？主人公はエステ業界で成功を収めた51歳の日本人女性早見紅子。舞台は上海。紅子が訪れる男石井京（けい）（39歳）が住んでいる家は淮海路エリア北方の陝西南路の長樂路にある。ここはフランス租界でプラタナスがよく似合うところ。ちなみに、淮海路エリアはガイド本で流行発信ストリートとして紹介されている。ここで見学したいのは、近時人気急上昇の上海新天地や上海孫中山故居記念館、中国共産党第一次全国代表大会会址記念館など。そして、淮海路エリアの南東端っこの下町エリア泰康路にあるのが田子坊だ。泰康路「田子坊」が観光スポットとして有名になったのは、1998年以降の盧湾区政府による整備と、画家で陶芸家の故・陳逸飛氏やフォトグラファーの爾冬強氏など著名なアーティストの進出を受けて、世界中から上海を夢見るアーティストが集まってきたため。今や「上海のSOHO」と呼ばれる田子坊には、デザインオフィスやアトリエ、そしておしゃれな喫茶店などがいっぱい。昔の上海石庫門というオールド集合住宅とありふれた路地のイメージは、ここ10年で一変したわけだ。

なぜそんなことを書いているの？そ

れは『シネマ23』の表紙は、プロカメラマンの陸震偉さんに撮影してもらった、そんな田子坊で遊ぶ私の写真だからだ。08年8月22日～24日、私は中国語による中国旅行記・映画評論本である『取景中国』出版のため、上海の陝西南路の紹興路にある上海文芸出版社を訪れた。ここは淮海路エリアの南方にある。そこで実現したのが本に掲載する写真撮影で、テーマは「遊」。その舞台が田子坊だ。太陽光線の関係で午後3時からの撮影はベスト。記念写真ではないからカメラ目線はダメ！自然に動いているところを撮るから自由に動いて！そんな指示に従いながら、私は約1時間初のモデル稼業を体験した。田子坊にはおしゃれな喫茶店もあれば、生活感溢れる狭い路地もある。表紙はそんな路地を歩く私の姿だ。さすがプロのカメラマンの撮影。そしてさすがすっかりモデル稼業が板についた私。そう思いませんか？
2009（平成21）年11月5日記



田子坊にはこんな路地がいっぱい